

平安和文会話文における準体句 —助詞「が」後接の場合—

土岐留美江

日本語教育講座

Quasi-nominal phrases in Heian Japanese Conversational Texts — Cases with Postpositional Particle “ga” —

Rumie TOKI

Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

ABSTRACT

This paper examines lexical-semantic properties of verbs, adjectives and auxiliaries appearing in quasi-nominal phrases (quasi-nominal construction with adnominal verbal ending) which are accompanied by postpositional particle “ga,” in comparison with those without postpositional particle and other attributive constructions such as adnominal clauses or final-attributives (sentences ending in adnominal form) in colloquial Heian Japanese.

The specific findings are as follows:

- (a) In quasi-nominal phrases with postpositional particle “ga,” verbs of motion/change, verbs of emotion/thought/perception are most frequent (about 40% each), while verbs of existence are least frequent (about 20%).
- (b) In quasi-nominal phrases, all adjectives types (emotional, attributive and intermediate) appear.
- (c) In quasi-nominal phrases, past and perfect auxiliaries are frequently used, but some conjecture auxiliaries are also frequent.

It is revealed that there are some usage differences between quasi-nominal phrases without postpositional particles and those with postpositional particle “ga.” In order to clarify the relationship between quasi-nominal phrases and final-attributives in the syntax of adnominal-ending forms, it is necessary to examine their uses more extensively, including those accompanied by other postpositional particles.

1. はじめに

古代日本語における活用語の連体形には、

- ①連体修飾節を形成する連体用法
- ②そこで文を終止する連体形終止法
- ③名詞を伴わずに連体形だけで名詞句相当の働きをする準体用法

の三つの用法がある。

①は現代日本語にも見られる通常の連体節形成機能であるが、②と③は古代語特有の用法である。

②の連体形終止法については、通常の終止形終止との表現性の差異や文体的特徴、または構文的要因などについて、山内(2003)を代表とする多くの先行研究がある。

また、③の準体用法については、断定の助動詞の活用語承接の衰退について連体形準体法の消滅と関連づ

けて論じた信太(1970)や、準体法の消滅過程について連体形や連体形終止との関連で考察した同(1987)、準体助詞「の」の成立との関連を論じた同(2006)、現代語の「の」節「こと」節との関係で、中古語準体句の特徴について述べた近藤(2001)などがある。

古代日本語に見られる連体形の用法の広範囲な広がりは、古代語の大きな特徴の一つであり、なぜ、①連体修飾節形成、②文終止、③名詞句形成、という相互にまったく異なると思われる文法機能が、連体形という同一の文法形式により担われるのかという問題が存在する。

これらの用法の相互の関係については、連体形終止を「準体句の直接表出(山内(2003) p.141)」と見る解釈がなされており、尾上(1982)などでも同様の立場から連体形終止法の表現性のメカニズムが詳細に分析されている。また、信太知子氏の一連の研究におい

ては、連体形による各用法がしばしば相互に関連づけられて論じられており、特に信太(1996)では、推量辞の出現に着目しつつ、連体句、準体句、接続句、終止形上接句、連体形終止文、係り結び文の六類の句について、連体形による句としての総括的な比較対照が試みられている。

しかし、連体形の各用法の特徴を、データに基づき数量的に比較分析した研究は、いまだ十分になされているとは言い難い。

土岐(2005)では、連体形終止法を終止形終止法やゾ、ナム共起の係り結びと比較し、連体形終止をとる場合に現れる連体形は、他の場合を比較して、動詞、形容詞、助動詞の各品詞別に語の頻出度に特徴があることを明らかにした。また、土岐(2008)では、同様の調査を連体節連体形について行い、結果を連体形終止の場合と比較した。その結果、連体節連体形と連体形終止連体形とでは、各品詞別に頻出する語の傾向に異なる様相が見られることを明らかにした。

残る分析対象である準体句のうち、助詞が後接しないケースについては土岐(2009)で分析を行った。本稿では、助詞「が」が後接する準体句について土岐(2009)と同様の分析を行い、土岐(2009)で観察された結果との比較考察を行う。

2. 調査対象資料

本稿で分析対象とした資料および使用テキストは以下の通りである。本稿で引用した土岐(2007)の連体法のデータも同様の資料に拠っている。

『源氏物語』岩波新日本古典大系本

一方、土岐(2005)で連体形終止法および終止形終止法の分析対象とした資料および使用テキストは以下のものであり、源氏のみを使用した準体法および連体法の場合とは調査範囲が異なっている。

『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『堤中納言物語』

『落窪物語』『源氏物語』『宇津保物語』：宇津保物語はおうふう「うつほ物語全」、大和物語は岩波旧日本古典大系本、その他は岩波新日本古典大系本による。

また、諸本の校異で当該の形態に異同があるものはすべて対象から除外した。

3. 分析対象形式

土岐(2005)で考察した連体形終止については、地の文と会話文とで大きく用法が異なることが先行研究により指摘されているため、会話文中のデータに限定して考察を行った。これらとの比較上、連体法を考察対象とした土岐(2008)や準体法(助詞なし)を考察対象とした土岐(2009)でも同様に、会話文中のデータに限定して分析を行った。そこで、本稿で扱う「が」準体法の用例も、以下、会話文中のデータに限定して

考察を進めていく。

また、「～給ふ」、「～侍り」、(ラ)ル、(サ)スなどの待遇表現の補助動詞、助動詞が後接している場合は分析対象に含めている。このような待遇表現の接辞が入る場合と入らない場合とで、何らかの相違があるか否かという点については、今後、吟味していく必要があると考えている。

4. 分析

4.1. 助動詞を含まない動詞準体節

「が」準体法の用例を、終止形・連体形異形の活用語と、形態からは活用形の判別がつかない終止形・連体形同形の活用語とに分けて、動詞の意味タイプ別に分類したのが、次の表1およびグラフ1である。土岐(2009)で明らかにした助詞なし準体法の分布傾向(表1'およびグラフ1')と比較する。

表1 「が」準体法 動詞意味タイプ別分布

	終止・連体 同形	終止・連体 異形	計
動作・変化	4 (40)	3 (38)	7 (39)
存在	2 (20)	2 (25)	4 (22)
感情・思考 知覚	4 (40)	3 (38)	7 (39)
計	10 (100)	8 (101)	18 (100)

グラフ1

「が」準体法 動詞意味タイプ別分布

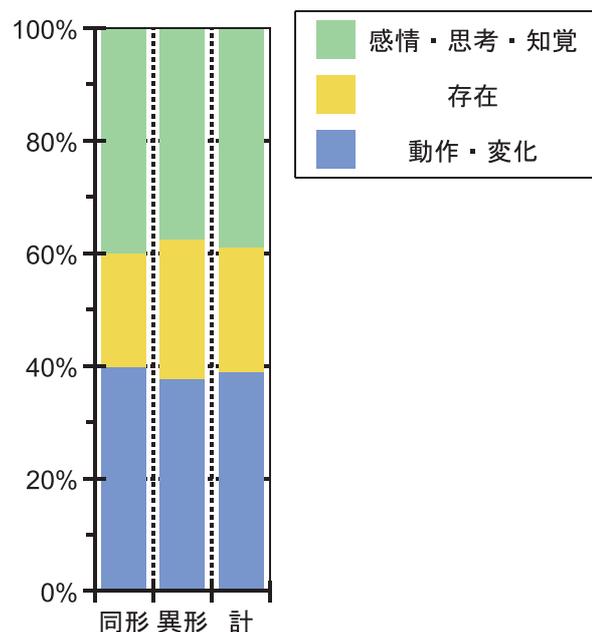
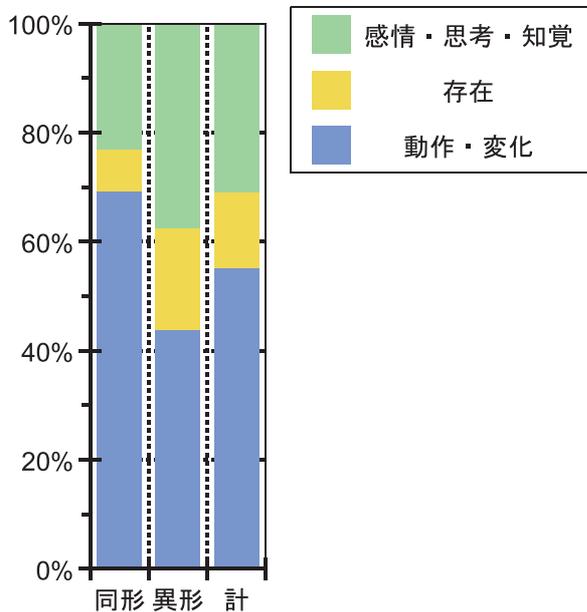


表1' 助詞なし準体法 動詞意味タイプ別分布

	終止・連体 同形	終止・連体 異形	計
	動作・変化	9 (69)	
存在	1 (8)	3 (19)	4 (14)
感情・思考 知覚	3 (23)	6 (38)	9 (31)
計	13 (100)	16 (101)	29 (100)

グラフ1' 助詞なし準体法 動詞意味タイプ別分布



準体法のデータは、助詞なしの場合も「が」助詞後接の場合も絶対数が十分とは言えないため、厳密な意味での比較分析は難しいのであるが、同形活用語と異形活用語を合わせた計の結果と比較してみると、「が」準体法と助詞無し準体法とでは、やや分布に異なりが見られる。「が」準体法は助詞なし準体法より、感情・思考・知覚動詞と存在詞の割合がそれぞれ若干増加しており、その分、相対的に動作・変化動詞の割合がやや少なくなっている。

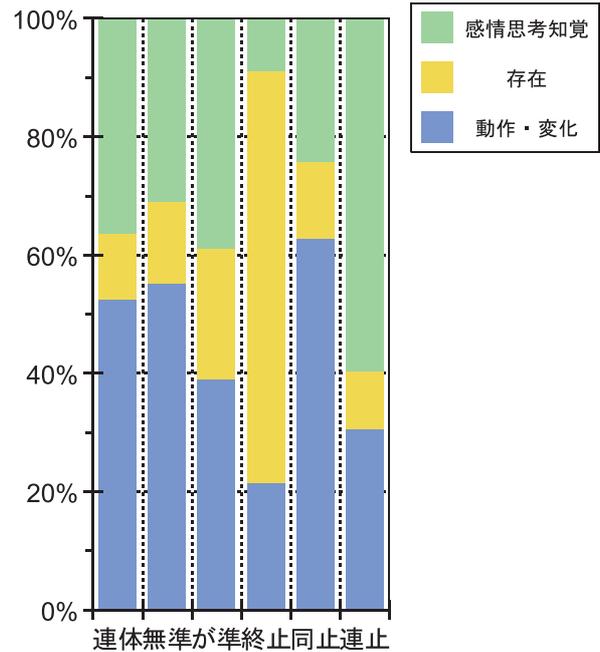
以下の表2およびグラフ2に、連体法、助詞なし準体法、「が」準体法の同形活用語と異形活用語を合わせた計のデータと、終止法の三種（終止・連体異形活用語の終止形終止、同形活用語終止、終止・連体異形活用語の連体形終止）を並べて示す。

「が」準体法の分布傾向は、助詞なし準体法の分布傾向と比較して、連体法との類似度が下がり、存在詞が多いことが特徴である終止形終止や、感情・思考・

表2 用法別 動詞意味タイプ別分布一覧

	連体法 連体	準体法		終止法		
		無準	が準	終止	同形	連体
動作・変化	731	16	7	41	192	19
存在	155	4	4	134	40	6
感情思考知覚	508	9	7	17	74	37
計	1394	29	18	192	306	62

グラフ2 用法別 動詞意味タイプ別分布



知覚動詞が多いことが特徴である連体形終止との共通性が若干増しているようにも見受けられる。

「が」準体法と助詞無し準体法とで、このような微妙な分布の差が出ていることの背景として次の二点が考えられる。

- ①助詞無し準体法を準体法として認定する際の他用法（終止法や連体法）との区別の問題
- ②助詞無し準体法の内部での意味構造のバリエーションの問題

①については、土岐(2009)でも指摘した。土岐(2009)で、特に終止法ともとれると指摘した4例以外以外にも、詳細に見ていくと、準体句と後続の句とに主格的な意味関係は認められるものの、そこで文が切れているものと捉え、終止法（主として土岐(2005)等で分類したE評価用法）と同様のものとして解釈することも可能なケースが、動作・変化動詞、存在詞、感情・思考・知覚動詞のそれぞれにかなりの量(29例中21例)見られる。次に該当する全例を示す。

【動作・変化動詞】

【同形】

- 1) (人々) 柳の葉を百度射あてつべき舎人どもの、

うけばりて射取る、無心なりや。(3, 311, 3)

- 2) (朱雀院) 来し方の御面おも起こし給ふ、本意のごと、いとうれしくなん。(3, 210, 7)
- 3) (北方) かう思よるべうもあらぬ方にしも、なげの言の葉を尽くし給ふ、かひなげなること(4, 243, 10)
- 4) (源氏) さても過ぐしはてねば、立つ時ものうく心とまる、苦しかりき(2, 201, 1)
- 5) (尼君) まめやかにのたまふかたじけなし(1, 165, 15)
- 6) (式部卿宮) さて心づよくものし給、いとをもなう人笑へなる事なり。(3, 125, 6)
- 7) (侍従) かくのみやらせ給、なさけなきこと(5, 249, 12)
- 8) (内大臣) かくをきてきこえ給、やうあらんとは思たまへながら(2, 293, 10)

【異形】

- 9) (夕霧) 宮す所の四十九日のわぎなど、大和の守なながしの朝臣ひとり扱ひはべる、いとあはれなるわぎなりや。(4, 133, 14)
- 10) (尼君) 背きにし世にたち返りてはべる、かひある御事を見たてまつりよるこぶ(3, 281, 1)
- 11) (源氏) われ人を起こさむ。手た、けば山彦の答ふる、いとうるさし(1, 123, 1)
- 12) (源氏) 便ないことし出でなどする、男の咎にしもあらぬ事なり(2, 409, 7)
- 13) (朱雀院) こゝにかく世を捨てたるに、三宮のおなじごと身をやつし給へる、すべなきやうに人の思ひ言ふも(4, 135, 6)

【存在動詞】

【異形】

- 14) (内舍人) 女房の御もとに知らぬところの人通ふやうになんきこしめす事ある、たい“／＼しき事なり(5, 247, 11)

【感情・思考・知覚動詞】

【同形】

- 15) (源氏) 宿世の引く方にて、なを／＼しきことに、あり／＼てなびく、いとしりびに人わろきことぞや(3, 167, 11)
- 16) (大納言) 此宮などのめで給ふ、さることぞかし(4, 242, 15)

【異形】

- 17) (朱雀院) 亡き親の面を伏せ、影をはづかしむるたぐひ多く聞こゆる、言ひもてゆけば、みなおなじことなり(3, 218, 5)
- 18) (花散里) 一条の宮渡したてまつり給へることと、かの大殿わたりなどに聞こゆる、いかなる御ことにかは(4, 141, 7)
- 19) (中宮) 猶かくひとりおはしまして、世の中にすい給へる御名のやう／＼聞こゆる、猶いとあし

きことなり。(4, 421, 13)

- 20) (源氏) あながちに隠して、心やすくも御覽ぜさせずなやましきこゆる、いとめざましや(2, 174, 2)
- 21) (源氏) 衛門督心とゞめてほ、笑まるゝ、いと心はづかしや(3, 404, 10)

逆に、終止法の可能性が比較的薄いと認定される準体法の例は、29例中、ヲ格相当の意味関係が認められる次の22)～25)の4例と、文脈上、または構文上のつながりに特徴のある次の26)～29)の4例の計8例のみである。

【動作・変化動詞】

【異形】

- 22) (家臣) 大夫はたゞ今なんまいりつる。道に御車引き出づる、見侍つ(5, 159, 1)

【存在動詞】

【同形】

- 23) (惟光) むかし見たまへし女房の尼にて侍、東山の辺に移したてまつらん(1, 128, 9)

【異形】

- 24) (源氏) 古体の御絵どもの侍る、まいらせむ(2, 174, 3)

【感情・思考・知覚動詞】

【同形】

- 25) (大宮) いとあはれにあやしきまで思ひあつかひ、心をさがいたまふ見はべるになむ、さま“／＼にかけとめられて(3, 65, 7)

【動作・変化動詞】

【同形】

- 26) (人ども) あやしく、をともせざりつる人のはてを、かくあつかはせ給ふ、誰ならむ(5, 295, 4)

【異形】

- 27) (里人) 古八の宮の御むすめ、(中略)、ことに悩み給こともなくてにはかに隠れ給へりとてさはぎ侍、その御葬送のぞうじども仕うまつり侍りとて

【存在動詞】

【異形】

- 28) (童) なをし着たる人のおはする、宮のおはしますなめり(1, 184, 11)

【感情・思考・知覚動詞】

【異形】

- 29) (大納言) 西の方に侍る人は、びわを心に入れて侍る、さもまねび取りつべくやおほえ侍らん。(4, 236, 11)

このような他用法との連続性が、用法認定の際に準体法とは異質な用例を混入させている可能性が否定出来ない面があり、その結果が、同じ準体法でありながら、「が」準体法と助詞無し準体法の分布に微妙な傾向の「揺れ」を引き起こしている可能性が考えられ

る¹。

②については、上述の①の説明中に既に述べたが、助詞無し準体法の例には、意味的に主格相当のものだけでなく、ヲ格相当をはじめとしてその他のものも混じっており、後続句との意味関係は一様ではない。そのため、当然、「が」準体法と助詞無し準体法とでは意味的差異を内包している分、分布にも何らかの差異が現れると考えられる。

以下に「が」準体法の動詞意味タイプ別全例を挙げる。

4.1.1 動作・変化動詞

【同形】

- 30) (源氏) いと多かめるつらに離れたらむ、をくるゝ雁を、しゝて尋ね給ふがふくつけきぞ。(3, 5, 12)
- 31) (大納言) さぶらふ人さへ、かくもてなすがやすからぬ と腹立ち給。(4, 237, 11)
- 32) (大君) 心ちには思ながら、もの言ふがいと苦しくてなん。(4, 452, 3)
- 33) (弁 (中此の文)) いとうつくしく生い出で給ふがかなしきなどゝぞ、中此は、文にさへ書きつけて (5, 91, 5)

【異形】

- 34) (母君) いままでとまり侍るがいとうきを、かゝる御使の蓬生の露分入給ふにつけてもいとはずかしうなん (1, 11, 7)
- 35) (紫上) こゝにさへうらみらるゝゆへになるが苦しきこと (3, 132, 7)
- 36) (中君) なをえこそ書きはべるまじけれ。やう／＼かう起きゐられなどしはべるが、げに限りありけるにこそとおぼゆるも、うとましよう心うくて (4, 358, 1)

4.1.2 存在動詞

【同形】

- 37) (惟光) ちいさき子どもなどの侍が言あやまりしつべきも言ひまぎらはして、また人なきさまをしゝてつくり侍 (1, 112, 4)
- 38) (内大臣) 内にさぶらふが、世の中うらめしげにて、この比まかでて侍るに、(2, 303, 13)

【異形】

- 39) (玉鬘) 院にさぶらはるゝが、いといたう世の中を思乱れ、中空なるやうにたゞよふを。(4, 288, 13)
- 40) (八宮) 心やましく掻い調べほのかにほころび出でたる物の音など、聞き所あるが多かりしかな (4, 348, 7)

4.1.3 感情・思考・知覚動詞

【同形】

- 41) (さぶらふ人) このず両どものおもしろきいゑづくり好むが、この宮の木立を心につけて、「放ち給はせてむや」と、ほとりにつきてあむなひし申さするを、さやうにせさせ給ひて、(2, 134, 2)
- 42) (源氏) 世の末にかくすき給へる心ばえを見るがおかしうもあはれにもおぼゆるかな。(2, 408, 8)
- 43) (八宮) いとすき給へる親王なれば、かゝる人なむと聞給が、なおもあらぬすさびなめり(4, 345, 8)
- 44) (匂宮) おどろ／＼しき心ちにも侍らぬを、みな人つゝしむべきやまゐのさまなりとのみものすれば、内にも宮にもおほしきはぐがいと苦しく、(5, 276, 12)

【異形】

- 45) (源氏) 身づからはさしも思入れ侍らねど、親たちのいとこと／＼しう思ひまどはるゝが心ぐるしさに、(1, 302, 8)
- 46) (薫) こゝに時々ものするにつけても、かひなきことのやすからずおぼゆるがいと益なきを、(5, 87, 7)
- 47) (中將君) 宿直人のことなど言ひをきて侍も、いとうしろめたけれど、かしこに腹立ちうらみらるゝがいと苦しければ と、うち泣きて帰る(5, 168, 5)

4.1.4 文脈における準体句の機能

「が」準体法の用例は、文脈においてすべて主格相当の機能を果たしていると認定出来るようである。土岐2008で助詞なし準体法の場合に示したと同様に、文脈上の後接句の形式を以下に一覧する。

【動作・変化動詞】

- 30) 形容詞句
31) 形容詞句
32) 形容詞句
33) 形容詞句
34) 形容詞句
35) 形容詞句 (形容詞+コト)
36) 評価・判断句

【存在動詞】

- 37) 動作動詞句
38) 感情・思考・知覚動詞句+動作動詞句
39) 感情・思考・知覚動詞句+感情・思考・知覚動詞句
40) 形容詞

【感情・思考・知覚動詞】

- 41) 感情・思考・知覚動詞句
42) 形容詞句

- 43) 評価述語 (すさびなめり)
 44) 形容詞句
 45) 形容詞句
 46) 形容詞句
 47) 形容詞句

動作・変化動詞の用例30)から35)までの6例は「動作・変化動詞」の内容(コト)「が」評価・感情形容詞句」という典型的な形式である。用例36)も、30)から35)までと同様のバリエーションの一種であるが、後接するのが意味的に一旦そこで終結する性質を有する単純な形容詞句ではなく、後続の文脈への連続性を内包した文相当句である。「[動作・変化動詞]の内容(コト)「が」評価・判断句「げに限りありけるにこそとおぼゆる(も)」という形式になっており、このため、用例36)は、後の時代の接続助詞的用法との連続性を可能性として内包する構造になっている。

存在詞の用例37)は、準体句「侍」が前出の「子供」と同格の名詞句として後続の動作動詞句「言い誤りしつべきも」の主体として機能している。用例38)は、同格となる名詞句は存在せず、存在詞準体法「さぶらふ」が人(弘徽殿女御)を表し、後続の「世の中うらめしげにて」という感情動詞句と、更に後続の「まかでて侍るに」という動作動詞句の両方の主体として機能している例である。次の用例39)も同様に存在詞準体法「さぶらはるゝ」が、冷泉院にお仕えする人(御息所)を表し、後続の「いといたう世の中を思乱れ」「中空なるようにたゞよふ」という二つの感情・思考・知覚動詞句の主体として機能している。用例40)は、存在詞準体法自体が「聞き所ある」という評価述語になっており、前出の「物の音」に関する同格的な説明になっている。更に「聞き所ある」コト・モノ「が」「多し(形容詞)」となり、全体の構造は動作・変化動詞の準体法の用例に典型的に見られた構造と類似している。

感情・思考・知覚動詞の用例41)は、前出の「ず両ども」と準体句「好むヒト」が同格として後続の「この宮の木立を心につけて」という感情・思考・知覚動詞句の主体として機能している。後続する感情・思考・知覚動詞句は、文相当のものであり、更に後へと続く文脈の連続性を有しているが、当該の準体句の表す意味内容がコトではなくヒトであるため、この用例41)の助詞「が」には、接続助詞的用法との連続性の可能性は伺えない。42)は、「見る」コト「が」形容詞と評価述語句という構造をなしており、動作・変化動詞に典型的に見られた「[動作・変化動詞]の内容(コト)「が」評価・感情形容詞句」という構造と同様の例である。以下、用例47)まで同様の構造である。

4.2. 助動詞を含まない形容詞準体節

「が」準体法の形容詞の例について、土岐(2009)と同様に、形容詞の意味についてABCの類型を立てて考察した吉田(1995)にならない、A情意的(感情形容詞、評価形容詞)、C属性的(次元形容詞²⁾、色彩形容詞、その他)、その中間的なB(否定形容詞、程度形容詞、感覚形容詞、時間形容詞)という三つの類型に分け、更にAの感情・評価形容詞の評価の意味について、プラス評価は+、マイナス評価は-という独自の符号を付したのが、次の表3である。

用例総数は少ないものの、助詞無し準体法の場合と比較して、意味的分布にはあきらかな相違点が観察される。比較のため、土岐(2009)で示した助詞無し準体法の形容詞の表も表3'として示す。

A(情意的)とB(中間的)とC(属性的)のすべての類型が現れる点は、「が」準体法と助詞無し準体法とで共通している。しかし、「が」準体法には助詞無し準体法には見られなかったプラス評価的な意味を伴う感情形容詞「めでたし」が1例観察されている。

連体形終止法では、Cの属性的形容詞は一例も見られず、Bの中間的な「なし」が3例見られる以外は、すべてAの情意的形容詞であり、かつ、Aの情意的形容詞の評価の意味合いは「良し」1例を除き、ほぼすべてマイナス評価の意味合いを伴うものであった。一方、連体法では形容詞の用例の総数が多いこともあって、ABCすべての類型が観察され、またプラス評価の意味合いを含む形容詞も豊富に見られた。(土岐(2005, 2007))

以上の結果と比較してみると、「が」準体法に、絶対数が非常に少ない中でABCすべての類型が現れ、

表3 「が」準体法形容詞総数順

形容詞	総数	類型	評価
なし	2	B	0
いときなし	1	A	-
心ぐるし	1	A	-
めでたし	1	A	+
薄し	1	C	0

表3' 準体法(助詞なし)形容詞総数順

形容詞	総数	類型	評価
なし	2	B	0
人げなし	1	A	-
もの思はし	1	A	-
若し	1	C	0

かつプラス評価の意味合いのものとマイナス評価の意味合いのものが両方含まれていることは、形容詞全体が、Aの、しかもマイナスの意味のものが相対的に多いという状況の中で、連体法との共通性の高さを伺わせる結果として注目される。

形容詞の出現率については、動詞節に対して、「が」準体法は29%（動詞節21例、形容詞節6例）となっている。土岐(2009)で述べたように、動詞節に対して、助詞無し準体法は14%（動詞節29例、形容詞節4例）であり、一方、連体形終止法29%（動詞節62例、形容詞節18例）、連体法113%（動詞節1394例、形容詞節1573例）となっており、以上の比較から、「が」準体法を加えると、準体法は連体形終止の結果により近似してくると言えよう。

連体法と終止法の形容詞については、6例以上出現した形容詞に限定した分析である。準体法の場合は、形容詞全体の総数が少なく、いずれも一種類の形容詞で6例以上現れるものはないため、厳密な意味での比較は難しいのであるが、以上の分析から、「が」準体法と助詞無し準体法の結果を合わせて準体法の位置づけを見ていくと、形容詞については、意味の種類の観点からは、より連体法に近似し、動詞と比較した出現率の観点からは、より連体形終止に近似してくると言えよう。

以下に「が」準体法形容詞の全用例を示す。

- 48) (源氏) かしこには、年経ぬれどかゝる人もなきがさうざうしくおぼゆるまゝに、前齋宮のおとなびものし給をだにこそ、あながちに扱ひきこゆめれば (2, 216, 12)
- 49) (柏木) 見し夢を心ひとつに思ひ合わせて、又語る人もなきが、いみじういぶせくもあるかな (4, 9, 5)
- 50) (大后) 致仕のおとゞも、又なくかしづくひとつむすめを、このかみの坊にておはするにはたてまつらで、おとうとの源氏にていとよきなきが元服の添ひ臥しに取り分き (1, 390, 5)
- 51) (源氏) さるまじき事どもの、心ぐるしきがあまた侍りし中に、つゐに心もとけず結ばほれてやみぬること、二つなむ侍る (2, 241, 4)
- 52) (内大臣) むすめかしづきて、げに疵なからむと思ひやりめでたきがものしたまはぬは。 (3, 14, 11)
- 53) (僧都) このあらん命は、葉の薄きが如し (5, 373, 4)

文脈（後接の句）における準体句の役割を以下に示す。

- 48) 主語（対象） 形容詞句
- 49) 主語（対象） 形容詞句

- 50) 所有格 体言（元服の添ひ臥し）
- 51) 主語（主体） 存在詞
- 52) 主語（主体） 動詞句「ものす」
- 53) 主語（対象） 形容詞句（慣用表現）

用例48)と49)は、助詞無し準体法の用例では主題としていたものと同様の構造である。準体句の内容に対する形容詞句が後続する。用例53)も同様の構造であるが、全体が「～が如し」という慣用表現を形成している例である。

用例50)は、「源氏」と準体句「いとよきなき」が同格であり、「が」はその源氏の「元服の添ひ臥し」という連体関係を形成している。これは、動詞の場合には見られなかった構造である。

用例52)は、「むすめ」と「思ひやりめでたき」が同格であり、動詞句「ものす」の主体となっている。ここでの「ものす」は文脈上、「いらっしゃる」という意味であり、存在詞と同等であると考えられる。

4.3. 助動詞を含む準体節

受け身と自発の（ラ）ル、使役の（サ）スなど、待遇表現以外の助動詞が現れる場合について総数が多い順にまとめたのが次の表4である。比較のため、土岐2008で示した助詞無し準体法の表も表4'として次に再掲する。

助動詞が現れる場合、節述語の中心となる品詞は動詞、形容詞、名詞と多岐に渡り、また、複数の助動詞が相互に接続するケースも多いが、述語の中心的品詞の種別は問わず、また、複数の助動詞が現れる場合は最句末のもののみを取り上げる。

助詞なし準体法（表4'）では、終止・連体異形の助動詞に関しては、タリ、ケリ、リ、キ、ツなどの過

表4 「が」準体法助動詞総数順

形式	総数
ム	18
ケリ	11
ベシ	8
ズ	8
キ	7
タリ	5
終止ナリ	2
体言ナリ	1
メリ	1
ラム	1
ツ	1
ヌ	1
ス(使役)	1

表4' 準体法(助詞なし)助動詞総数順

形式	総数
ム	20
タリ	19
ケリ	17
リ	13
キ	12
ツ	10
ラム	7
ズ	6
体言ナリ	4
メリ	3
終止ナリ	1
連体ナリ	1
ベシ	1
ヌ	1

去・完了系の助動詞が上位を占めていた。終止・連体同形のム、ラムなどを加えると、推量のムが最も多いが、実数としてはムが20例に対して、タリ19例、ケリ17例、リ13例、キ12例、ツ10例、ラム7例、と分布はほぼ近接しており、推量系が飛び抜けて多いわけではなく、否定のズが6例でラムのすぐ次に続いていた。また、完了のツが10例とまとまった用例数が見られるのに対し、ヌは1例しか見られないことが特徴であった。

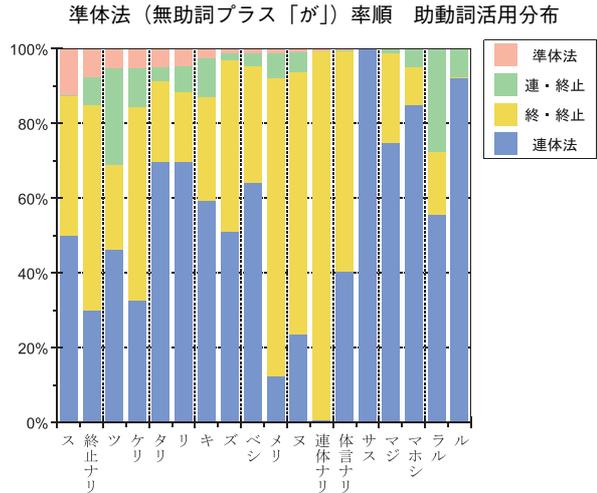
一方、「が」準体法（表4）では、タリやツの順位が下がっており、ツは1例しか見られないためヌと並んでいる。一位の推量ムが18例なのに対し、二位のケリは11例と、ムの割合がかなり重くなっている。更に推量のベシが8例と三位に上昇したことで、全体的に過去・完了系の助動詞が後退し、かわりに推量系の助動詞の比率が増す結果となっている。

以上の結果を土岐（2008）で述べた連体法と連体形終止法の結果と比較すると、過去・完了系の助動詞と推量系の助動詞とで特に秩序は認められず、助動詞の意味タイプによる分布傾向は認められなかった連体法と、終止・連体異形の助動詞に関しては過去・完了系が上位に位置する傾向はあるが、推量系のベシやメリもかなりの割合で現れる連体形終止法に対し、「が」助詞準体法の場合は、助詞無し準体法と比較して、より準体法としての独自色が弱まり、他の用法との類似性が増しているようである。

終止・連体同形の助動詞ム、ケム、ラム、マシ、ジなどを除き、「が」準体法と助詞無し準体法のデータを併せて、各用法の出現総数に占める準体法の割合を次の表5およびグラフ5に示す。

準体法率順に見た場合、助詞無し準体法ではツ、リ、タリといった完了の助動詞に過去のケリ、キが続き、その間に推量の終止ナリが現れていたが、今回の「が」準体法のデータを加えると、総数がかかなり少ないため準体法が1例しかなくても高率になってしまっている使役のスを除くと、推量の終止ナリが1位となり、完

グラフ5



了のツ、過去のケリ、完了のタリ、リ、過去のキ、否定のズと続く。ここでも、推量系の助動詞の比率が増加していることが読み取れる。

5. おわりに

本稿での分析結果を以下にまとめる。

古代日本語会話文中の「が」準体句のデータを分析した結果、以下のような特徴が観察された。

1. 助動詞を含まない動詞準体句の場合、現れる動詞の意味タイプは、
 - 1 動作・変化動詞
 - 2 感情・思考・知覚動詞
 が、4割弱の同率1位であり、
 - 3 存在詞
 が他の半分程度の2割強である。
2. 助動詞を含まない形容詞準体句の場合、形容詞の意味類型は
 - A 情緒的
 - B 中間的
 - C 属性的形容詞
 のすべてが現れる。
3. 助動詞を含む準体句の場合、過去・完了系の助動詞が多い傾向はあるが、推量系の助動詞も上位に現れる。

土岐（2009）では、意味的に分布の偏りの少ないニュートラルな文法機能形式と言える連体法と、強い意味的分布の偏りを示す連体形終止法に対して、準体法のデータを比較分析し、準体句と連体形終止との共通点あまり多くないことを指摘した。その結果により、先行研究でなされている、連体形終止を準体句の直接表出として原理的に結びつけて論じることへの妥

表5 準体法（無助詞プラス「が」）率順 助動詞活用分布

形式	連体法	終・終止	連・終止	準体法	計	準体法率 (対計%)
ス	4	3	0	1	8	12.50
終止ナリ	12	22	3	3	40	7.50
ツ	97	48	54	11	210	5.24
ケリ	178	280	57	28	543	5.16
タリ	345	106	19	24	494	4.86
リ	193	52	19	13	277	4.69
キ	433	203	75	19	730	2.60
ズ	557	502	19	14	1092	1.28
ベシ	431	209	23	9	672	1.34
メリ	41	262	22	4	329	1.20
ヌ	56	167	13	2	238	0.84
連体ナリ	1	174	0	1	176	0.57
体言ナリ	407	597	0	5	1009	0.50
サス	1	0	0	0	1	0.00
マジ	113	36	2	0	151	0.00
マホシ	17	2	1	0	20	0.00
ラル	10	3	5	0	18	0.00
ル	12	0	1	0	13	0.00

当性に疑問があることを述べた。しかし、比較対象として、助詞無し準体法だけでなく、今回調査した「が」準体法を加えたことで、やや異なる傾向が認められることが観察された。

1については、「が」準体法の分布傾向は、助詞無し準体法の分布傾向と比較して、連体法との類似度が下がり、存在詞が多いことが特徴である終止形終止や、感情・思考・知覚動詞が多いことが特徴である連体形終止との共通性が増していた。

また、2については、「が」準体法と助詞無し準体法の結果を合わせて準体法の位置づけを見ていくと、形容詞については、意味の類型の観点からは、より連体法に近似し、動詞と比較した出現率の観点からは、より連体形終止に近似していた。

3については、過去・完了系の助動詞が顕著に上位を占めていた助詞無し準体法に対し、「が」準体法は、推量系の助動詞も上位に現れる。つまり、過去・完了系の助動詞と推量系の助動詞とで特に秩序は認められなかった連体法と、過去・完了系が上位に位置する傾向はあるが、推量系のベシやメリもかなりの割合で現れる連体形終止法に対し、「が」準体法は、助詞無し準体法より連体形終止との類似性が増していると言える。

今後も引き続き、他の助詞が後接する準体法の分析を進め、それらの結果とも併せて考察していく必要がある。

注

1. 準体法の用法認定の難しさについては信太(1987)でも指摘されている。信太(1987)では、『天草本平家物語』における連体形準体法について、『覚一本』と比較しつつ分析しているが、準体句を連体句の一種として「連体句」と呼び、用例の認定に関して以下のような扱いをしている。
用例採取に関してつけ加えるならば、連体句と認めるか否かが問題になる場合がかなりみられる。特に接続句との区別、連体止の文や終助詞がつく場合の取り扱いが問題になるが、前者の場合は格関係が少しでも認められれば連体句とし、後者については、覚一本と天草本とを一率に扱えないという事情があるので、体言止の文も含めて本稿では参考として掲げるに留めた。(p. 125)
- 2 吉田(1995)によると、せばし、たかし、ちかし、とほし、ながし、るかし、みじかし、ひろし、ほそし、ちひさしがこれにあたる。

主要参考文献

- 尾上 圭介(1982)「文の基本構成・史的展開」森岡健二他編『講座日本語学2 文法史』1-19
同 (2001)『文法と意味I』くろしお出版

- 小池 清治(1967)「連体形終止法の表現効果—今昔物語集・源氏物語を中心に—」『国文学 言語と文芸』54, 12-21
近藤 泰弘(1986)「〈結び〉の用言の構文的性格」『日本語学』5-2, 22-30
同 (2000)『日本語記述文法の理論』ひつじ書房
近藤 泰弘(2001)「名詞節と項構造」『日本語文法』1-1, 41-52
信太 知子(1970)「断定の助動詞の活用語承接について—連体形準体法の消滅を背景として—」『国語学』82
同 (1987)「『天草本平家物語』における連体形準体法について—『覚一本』との比較を中心に消滅過程の検討など—」『近代語研究7』(吉田澄夫博士頌寿記念論文集)近代語学会, 123-139
同 (1996)「古代語連体形の構成する句の特質—準体句を中心に句相互の関連性について—」『神女大國文』7, 172-189
同 (2006)「衰退期の連体形準体法と準体助詞「の」—句構造の観点から—」『神女大國文』17, 29-44
土岐留美江(2005)「平安和文会話文における連体形終止文」『日本語の研究』1-4, 16-31
同 (2008)「平安和文会話文における連体修飾連体形と連体形終止連体形の比較分析」『愛知教育大学研究報告(人文・社会科学編)』57, 55-62
同 (2009)「平安和文会話文における準体句—助詞が後接しない場合—」『愛知教育大学研究報告(人文・社会科学編)』58, 31-39
山内洋一郎(1959)「院政期の連体形終止」『国文学攷』21, 240-250(広島大学国語国文学会)
同 (1963)「奈良時代の連体形終止」『国文学攷』30, 33-41(広島大学国語国文学会)
同 (1964)「助動詞「うず」について—連体形終止の異例として—」『広島大学文学部紀要』23-3, 125-152
同 (1970)「下二段「たまふ」の終止法—連体形終止の観点から—」『国文学攷』54, 55-58(広島大学国語国文学会)
同 (1992)「平安時代の連体形終止」井上親雄・山内洋一郎編『古代語の構造と展開』25-44(和泉書院)
同 (1997)「助動詞「うず」の連体形終止について—中世における終止形の残存—」『文教国文学』37, 1-8
同 (2003)『活用と活用形の通時的研究』清文堂出版
吉田 光浩(1995)「平安期形容詞の意味と終止用法について—『枕草子』『源氏物語』『栄花物語』を資料として—」宮地裕・敦子先生古希記念論集刊行会編『宮地裕・敦子先生古希記念論集 日本語の研究』112-145(明治書院)
IWASAKI, Shoichi(2000)“Suppressed Assertion and the Functions of the Final-Attributive in Prose and Poetry of Heian Japanese”. Susan C.Herring, Peter van Reenen and Lene Schosler (eds.) Textual Parameters in Older Languages, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. 237-272
(2009年9月8日受理)